

季節を告げる声

野瀬 隆平

今年、初めて鶯のさえずりを聴いたのは、三月の初旬だった。連れ合いと朝の散歩をしている時に、木立から聞こえてきた。正に春告げ鳥である。あれから、もう五か月も経っている。梅雨を経て暑い夏を迎え、はや暦の上では立秋である。

書斎の窓からは、「ミン、ミン、ミン、ミンミンミー」という、ことさらに暑さを感じさせるミンミンゼミの音が聞こえてくる。と同時に耳を澄ますと、あの鶯の声も聞こえて来るではないか。夏を象徴するような蝉と、春を告げる鳥が二重唱を唄っているのだ。これまで、鶯と蝉の声を同時に聴いたという記憶があまりない。鶯がさえずるのは、オスがメスを呼んでいるからだとも聞いたことがある。暑い最中に頑張っているのには、何か特別な理由でもあるのだろうか。

夏も終わりに近づくと、暑さを演出していたあの蝉も、主役が交代する。夕暮れ時に、「カナ、カナ、カナ」と鳴く、蝸の出番である。どこか物悲しいこの声を聞くと、もう秋は近い。いや、蝸は（寒蝉）とも書いて秋の季語であり、秋告げ虫と云われる。ちなみに、法師蝉、ツクツクボウシも、やはり秋の季語だ。暦を見ると、今年は8月12日が七十二候の一つである「寒蝉鳴」（ひぐらしなく）に当たる。

蝸に 一すじ長き 夕日かな 正岡子規

ところで、この蝉、地上に出てから一週間かそこらで命をとじるものもある。まことに儂い一生であるかに見える。しかし、逆にこれは地上に住む人間の見方かもしれない。

蝉にとっては、何年もの長い間いる地下こそが、蝉が存在する本来の場所であると考えられることもできる。地上には、人間を始めとする外敵が多くて危険である。子孫を残すため、やむなく地上に出てくるのであれば、短い方が良い。そういえば、蝉も鶯と同じく鳴くのはオスだけだ。

柄にもなく、うぐいすや蝉の声に心が向かうのは、近ごろ都会の喧騒から遠ざかっていて、聴覚が鋭くなっているからなの、あるいは年老いたせいなのか。